

映画『うまれる』

結婚したら子どもが生まれてくる。それはあまりにも当たり前のことのように思われてきた。しかしながら、昨今の日本では、晩婚化や晩産化によって、当たり前のように子どもが生まれてはこないことが認識されるようになってきました。夫婦であれば、自然に子が授かるというだけでなく、一定の割合で不妊夫婦が存在していることも知られています。そうした状況の中、生殖補助技術は進展し、子の誕生によって始まる親と子の関係や家族については、法的にも倫理的にも議論が尽くされているとは言いがたいままです。

両親の不仲や虐待の経験から親になることに戸惑う夫婦、出産予定日にわが子を失った夫婦、子どもを望んだものの授からない人生を受け入れた夫婦、完治しない障害 (18トリソミー) を持つ子を育てる夫婦という4組の夫婦を描いたドキュメンタリー映画『うまれる』が、2011年に劇場公開後、自主上映という形で公開されています。天理大学の学生有志によって企画されて、天理大学でも上映会がありました。上映前に披露された監督のメッセージは、

映画『うまれる』は、「子供は親を選んで生まれてくる」という胎内記憶をモチーフに、命を見つめる4組の夫婦の物語を通して、「自分たちが生まれてきた意味や家族の絆、命の大切さ、人との繋がりを考える、ドキュメンタリー映画」です。妊娠・出産・育児、流産・死産、不妊、障害など『うまれる』ということ幅広く捉える事で、親子関係やパートナーシップ、男性の役割、そして『生きる』という事を考える・感じる内容になっております。重いテーマだと思われるかもしれませんが、とても前向きで明るいストーリー展開となっていますので、観終わった後は温かい気持ちになっていただけるのでは、と思っています。

というものでした。

映像クリエイターである豪田トモ監督は、「子どもが親を選ぶ」という考え方を聞いたことをきっかけに、長年わだかまりのあった、「自身の親子関係を見つめ直すために映画製作をスタート」した(『うまれる』公式HP参照)そうです。この「子どもが親を選んで生まれてきた」というのは、子どもたちの胎内記憶から導き出され、約30%の幼子がそうした記憶を語るということです。胎内記憶研究の第一人者といわれる池川明産婦人科医によると、胎内記憶を持つ子どもたちは、「人の役に立つために生まれてきた」と全員が答え、「自分が生まれて、お母さんが幸せ、これが子どもたちにとっての幸せ」であると語っている(ドキュメンタリー映画『かみさまのやくそく』、『うまれる』でも子どもが自分の胎内記憶を語っています)とインタビューに答えています。

もし、子が選んで胎内へ宿ったとするなら、「産みの母」こそが子どもにとってのお母さんということになるのでしょうか。あるいは、生まれてくる子どもを育てていこうとしている夫婦こそが両親なのでしょうか。受胎したのに誕生しなかった子どもたちについて、親となるはずだった夫婦はどのようにその事実を受容していくのでしょうか。一方、「人の役に立つため

に生まれてきた」という子どもたちの語り、人と人とのつながり、いのちのつながりの中でしか生きてはいない人間という存在の有り様をダイレクトに言い表しているなら、人間の生き方を照らし、指し示していることとなります。「人の役に立つために生まれてきた」という子どもたちの語りは、そのいのちを「親」に奪われてしまわないための理由をも提示してくれています。生まれてきたことには、それぞれに意味があるということなのですから。そして、映画『うまれる』は、監督のメッセージにあったように、出産、死産、不妊、障害児の誕生など、さまざまな「生まれる」状況が、家族となっていくことやパートナーであること、そしてその生き方として迫ってきました。生まれてくること、そのこと自体が簡単なことではないということ、その新たないのちが、家族の歴史をつくっていくのだということも感じさせてくれました。

かけがえのない“いのち”

1月末、「体重331gの赤ちゃん退院」というニュースが流れました。静岡こども病院で2013年1月に胎内で危険な状態になったため、妊娠24週で帝王切開によって出生した男児が、消化管手術4回を乗り越えて退院したということです。体重350g未満の赤ちゃんが生存、退院する例はたいへん珍しいようで、特に男児はまれだと病院は語っています。今では当たり前となっている病院などの施設での出産は、日本では昭和の高度経済成長の頃定着したようです。人々の働き方が変わり、労働と家庭が別々の場所となったことや、核家族が増えてきたこともその要因です。何より、出産が医学の対象となり、医師の手によってより安全な出産ができるようになって、妊産婦や乳幼児の死亡率が格段に減ってきました。そして、受精や受胎までもが、生殖補助技術として発展してきました。しかしなお、出産は死と隣り合わせのままでもあります。

『うまれる』に登場した出産予定日(誕生日)が命日になってしまった子どももいます。そして、世界では命がけで出産に臨む産婦が多数います。時事通信が特集した「チンゲに祈りを込めて ザンビアの出産」では、「国民の約8割が1日2ドル未満で暮らす貧困層で、とりわけ農村部の暮らしは厳しく、女性は十分な医療ケアを受けられない状態で妊娠・出産を繰り返し、時に合併症で命を落とす」ことが報告されています。記事は「世界では年間36万人、1日に1,000人もの妊産婦が死亡している。その99%が途上国、60%近くがサハラ砂漠以南のアフリカで。新たな命を産み出すはずの女性が、なぜ自らの命を落とさなくてはならないのか」(<http://www.jiji.com/jc/v4?id=zambia0001>)という問題意識で取材したと述べています。「医療施設での分娩を増やすため、妊産婦と診療所の『距離』を減らすこと」に全力を注いでいるといいます。死ななくてもよい産婦・妊婦が衛生的な場所で適切な手当てが受けられるようにということですが、その目標が2015年までに達成することは困難なようです。新しいいのちとそれを宿し育む女性のいのち。そのどちらもが大切ないのちです。出産の時ほど、そのいのちが死と直面している。いのちの本質がここにあるように思われます。